



三浦 恵子 新連載

今号から御世話になります三浦(旧姓正木)恵子と申します。対人援助マガジンの執筆者の中には学生時代に御指導を受けた方、近畿管内勤務時代に研修その他で御世話になった方も多く、懐かしい反面やや緊張しています。

連載開始に際して自らの処遇経験を振り返りましたが時の流れのなんと速いこと…私自身は40歳頃までは「まず自分がどンドン動く」ことをモットーに、公私共に様々な活動を展開して参りました。

しかし東日本大震災の復興業務に奔走するなかで、「人間は誰でも年を取る」といった自然の摂理を忘れセルフメンテナンスを怠った結果、対処療法で済ませていた不調が実は難しい病気であったことが判明、装具の助けを借りて仕事と治療の両立をする生活が長く続きました。

そのため今は「支える人を支える」というスタンスで、勢いではなく息の長い支援を行うことを心がけています。幸い新しい治療を実践される良医との出会いや上司・同僚の励ましや支援により今年3月に装具も外れ、社会的な活動の幅を少しずつ元に戻していついかなる本誌への連載のお勧めがあり、感謝の気持ちとともにお受けすることにいたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

川本 静香 新連載

8月中旬に函館に行ってきました。現地は涼しいどころか寒いくらいで、地元の人「9月から10月くらいの気温だね。いつもはこんなことないのだけど」とのこと。天候も悪く、函館山からの夜景は残念ながら霧まみれで見られませんでした。それでも見知らぬ土地や人との出会い、美味しい料理など、とても楽しい旅行でした。旅っていいなあと猛暑の関西に帰ってきてから痛感しています。また旅に出かけたい衝動にかられながら、仕事がんばります。。。

飯田奈美子 新連載

初めまして。第30号から連載を開始させていただくことになりました。どうぞよろしくお祈りします。大分以前に連載のお声かけをしていただいたのですが、仕事が多忙であったこと、自分に連載ができるのかという不安があり、その時はお断りをし、今回、再びお声かけしてもらいました。力不足ではあると思いますが、せっかくのチャンスなのでチャレンジをしようと思ひお引き受けさせていただきました。

団先生から仕事、関心事や自分の問題意識をテーマにしたらいいとアドバイスをいただいたので、私が今までしてきた仕事内容や、コミュニティ通に関する運動についての振り返りや、それらの活動を通じて感じた問題意識などをエッセー風を書いていこうと思っております。これからどうぞよろしくお願いします。

山口洋典 連載二回目

本文にも記したとおり、前回、連載第1回目の原稿に対し、何人かから反応をいただきました。ありがとうございました。また、原稿をお読みいただいて、夏の休暇と重ねつつ、オールポーまで足を伸ばして頂いた方もおられます。少しでも多くの方に、教授法としてではなく、教育戦略としてのPBLに関心が向けられればと願っています。

「雑誌とは連載があって成り立つものである」と、オールポー大学での学外研究への道をつないでいただいたサトウタツヤ先生にお伺いしました。7月11日から14日に

かけて、オランダ、アムステルダムでのヨーロッパ社会心理学会にてお目にかかった折のことです。オールポーとアムステルダムのあいだは一日複数の直行便が運行されているため、気軽に出かけたところ、アムステルダムの隣町であるライデンにも足を伸ばし、サトウ先生らと共に幕府の名を受けて留学した西周先生(心理学の訳語を生み出したことで知られる)らの足跡を辿りました。

足取り軽く出かけているヨーロッパ生活ですが、あまりに自適な暮らしの反動か、人生初の痛風の発作に見舞われて、苦しい夏を送ることになりました。

(写真、1863年から1865年に西周先生と津田真道先生が通ったシモン・ヒッセルング先生の旧邸前で写真に収まるサトウ先生)



寺田 宏志 連載二回目

夏休みに熊野方面に行ってきました。神話の世界を身近に感じながら、深い緑の森、コバルトブルーの川をながめて、心を洗ってもらいました。

そういえば、新宮に、徐福公園がありました。秦の始皇帝に命じられて、不老不死の薬を探しに日本に渡ってきた徐福。日本各地で薬草を見つけますが、秦には帰らず、日本で薬草などの知識を広めてくれました。

徐福茶を飲んで徐福みたいになりたいなと思ったり、原稿を書いたらエリクソンみたいになりたいなと思ったりした8月でした。

関谷 啓子

最近、とある病院で一人の高齢男性と知り合った。待合いで若いスタッフと少し行き違いがあり無然とした表情が気になってこちらから声をかけた。

真夏の陽射しに溶けてしまいそうな東山目を向けておられたので「暑いですね」から始まり四方山話をしているうちにお互いの家が大通りを挟んですぐ近くだと判った。生まれも育ちも今の家だとの事。



突然、彼が小学校時代の家の近辺の話をする。自宅から北は山裾まで見渡す限り畑だった事。大通りは土手になっていてそこをよじ登って学校に通った事。次々と記憶が溶けだしてくるという感じ。

聞けば娘達が卒業した小学校の第一期卒業生だと言われる。

思わず「校歌覚えていますか」と突っ込んだら「勿論！！」との返事。それでは、、、と待合室で二人で A 小学校校歌を2番まで斉唱。

聞けば御歳94歳。それから戦争の話、捕虜になった話、帰国して目にした日本の変化等々一時間程話は続いた。

別れる時、「あ～あ。楽しかった。こんな話は家族は聞いてくれないのでねえ。またどこかで会えるといいなあ。近所だからね」と言って下さった。

父もフィリピンの生き残りだったが、私は父から戦争の話をお聴きとはしなかったし、父も一言も話さなかった。

認知症の進んだ父が、施設の男性スタッフの着ていた迷彩色の服の裾を掴んで、その時だけはしっかりとした眼で「陸軍か？」と尋ねた時の表情が忘れられない。

黒田 長宏

ほとんど短信が本文に混在しているだけのような生活である。本文が日常の大

半であるような生活である。本文以外は特に何事もないように過ぎて行く。斯様に今日までのところは感じてみたものの、社会はこんがらがってひゅーひゅーしている。一人見つけるのにさんざん苦労している私がいれば、社会は倫理を逸脱した人が報道されている。口利きでお金がいくらでも動かせる人もいる。目を転じよう。世間はスキャンダルばかりでは無い。藤井聡太四段とか、清宮幸太郎選手のように、20歳にもならないのに激動な人生に入ってしまう人がいると言うのに、私など50歳を過ぎてしまったのに平々凡々かも知れない。(おいおい。やっと一段落してきたばかりだろうが。ある面では無名ながらも激動だったろうよ。やれやれ。)でも、変身するのも面倒くさい。暑いのが原因かな。

鶴野祐介

「9月3日から5日まで、岩手県花巻市・遠野市・大槌町をゼミの学生たちと回ってきます。宮沢賢治の「風の又三郎」、遠野の「道の駅 風の丘」、大槌町の「風の電話」、「風」がキーワードの旅になりそうです。

臼井 正樹

前回の短信では、介護人材を巡る論点整理を行ったが、今回はその論点に対する課題解決に向けた取り組みの方向性を述べた。前回の短信にも記したが、3年近く前に整理したものがもとであることから、一部、現状と合わない点も出てきているがご容赦いただきたい。

介護福祉が単なる食事、入浴、排泄の介護ではなく、社会的支援を目指すものであるというのが今回の趣旨である。しかし、まだ論点として十分に煮詰まり切っていない状況にある。次回は、できれば社会的支援の内容に対し切り込んでみたい。

山下桂永子

今年の夏も、無事に町家合宿が行われました。暑かった、ひたすら暑かった。動物園のライオンさんもバクさんもグッタリしていました。いつも町家合宿を応援してくださっているみなさま、今年もご支援

ありがとうございました。これからも応援よろしく願います(応援ないと、ちょいちょい心が折れます)。毎回、終わった瞬間には「ああ来年こそはここはこうして、こう準備して…」と思うんですが、結局できずじまいなことが、今年もありました。ああ来年こそは…。

今回の寄稿は、町家合宿の中でも、メインイベントとも言える「古着交換」について書きました。いろいろ書いているうちに収集がつかなくなってきて、2回に分けることにしました。1回目は、自分が古着交換について思うことを書きました。次回は(たぶん)「私はこういう意図で古着交換してるけど、結果、他のみんなはどうだった」みたいなことを書こうと思っています。いろいろ思ってやっけてはいるけど、個人的にはベタに楽しんでいる感じが伝われば幸いです。

尾上明代

春休みに続き、この夏も「対人援助者のためのドラマセラピー」と題して、楽しみながら援助者としての自分を見つめていただくセッションの新作・第二弾を創って東京で実施した。「何故自分はこの仕事をしているのか」。ドラマと内省を組み合わせ深く深く探索していくと、表面的な答えと違うものが浮上する可能性が高い。参加者は、その気づきを得たのち、今後に向けてさらにパワーアップできる自分を見つけて下さったと感じた。もう一つ東京で実施したのは「Change! 変わることは怖くない」と題して定期的に提供している連続セッションで、毎回、参加者自身を変えたいところを変えることのできる力を身につける。ついでにこの夏は私自身も、変わりたいところを変えられたという、相互作用がセルフセラピーとなったのも嬉しい。明日から札幌で同じセッションをする。「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である。」というダーウインのことは紹介して参加者とともに、私もさらに変化した自分を創りたい。

小池英梨子

7月21日(金)に対人援助学会の第46回目の研究会がありました。今回は、「猫

から目線で動く支援」というタイトルで私が話題提供をさせてもらった。私はこれまで、主に猫が絡む問題に対応してきましたが、どのケースも“人”の問題と密接に関わっていた。動物問題は、人が作り出した問題であるがゆえに、動物問題の近くには必ず人の問題が存在する。したがって、人や地域に対して介入支援を行うことが不可欠であった。また、“猫問題”改善に向け、介入する中で、お手上げ状態だった“人の問題”が改善に向けて動き出すことも多々あった。猫を通して、人や地域、社会のシステムが動く、それは、システム論やコミュニティ心理学の視点から捉えれば納得できることでもあった。「切り離しによる原因特定と取り除き」ではなく、「包括的にとらえ、ちいさなシステムチェンジを行う」猫から目線で動いた支援について、具体的なケースの紹介と、ちょこっとだけシステム論やコミュニティ心理学をベースとした理論の紹介をさせてもらった。参加者が来てくれるか不安だったが、嬉しいことにケースワーカーさん、スクールソーシャルワーカー、ケアマネさん、心理士さん、教育関係者、病院関係者の方など沢山の方が興味をもって参加してくれた。その事実ですごく励まされた。



三野宏治

長男と二人で福岡へ行った。福岡市立博物館での「黄金のファラオと大ピラミッド展」を見にいくためだ。私は黄金のファラオや大ピラミッドのことは、嫌いではないが大好きでもない。長男は古代エジプトにご執心のようで、本などを眺めている。どうやらミイラの作り方を知りたいらしい。知ったところでどうなるものでもないのだが、「それを言っちゃあ」多くの学問が「おしまいよ」なのだ。

そこでこの博覧会に行くことにしたが、関東での開催は終わっており最終の福岡へと変わった。丁度、義妹(長男から見れば叔母さん)の結婚式に京都へ行ったついでに、関空から飛行機で行くことにした。息子は1歳のころ、大阪から秋田へ飛行機で来たことなどももちろん忘れてお



り、初めて(ではないのだが)の飛行機に興奮していた。そして、いよいよ搭乗する際に「墜落しないよね!」と大声で私に聞いた。「可能性は極めて低い」ことを教えてあったのでそれを伝えると、「交通事故にあうより、ないんだよね!」などと大声で言う。周りの人は何を思ったのだろう。

無事、福岡につき宿に入り息子のリクエストで博多ラーメンを食べに行く。人気の店らしく並んでようやく店に入る。大変おいしい豚骨ラーメンだったので息子に感想を聞いてみたら、「ラーメンよりチャーハンがおいしいね」と元気にこたえる。店の人はどう思ったのだろう。

翌日、炎天下よく歩いててんぶら定食が安く食べられる店に立ち寄った。ここでも並んだ。揚げたてのてんぶらが次から次へと出てくる。それらのてんぶらを食べながら、氷の入った水をお代わりし「冷たい水最高〜!」と連呼する息子。並んでいる人は何を感じたのだろう。

ものすごく揺れる(乱暴な運転の)バスに乗って福岡市立博物館につく。バスを降りるとき「福岡のバスの運転(手)は群馬より下手だね」とまっとうな感想を元気に言った。バスの運転手はなにを考えたのだろう。

2時間ほど「黄金のファラオ」やら棺桶や埋葬品などをみた。ここで息子はなにも言わなかった。彼はなにを思ったのだろう。帰りのバスは混んでいた。座っていた息子がご高齢の男性に席を譲っていた。その男性がバスを降りるとき、「ありがとうね」と丁寧にお礼をいってくださった。息子はうなずくだけだった。いったい彼らは何

を思ったのだろうか。

特に大それた出来事や出会いがあったわけではない。しかし、道を聞いた時に丁寧な教えてくださった人や街頭募金を募っている人とのやり取り、お土産物を選んでいるときに手伝ってくださった方などとの出会いがあった。すこし、時間をあけて息子にこの旅行のことを聞いてみようと思う。

松村奈奈子

今年のお盆。

8月13日。

ふとペルセウス座流星群を見よう!と夜中に夫婦で京都市内から1時間の北部の山あいドライブ。月明かりでしたが、それなりに流れ星を見られて感動しました。

しかし、その夜、心に残ったのは流れ星ではなく、道中の民家の並ぶ府道にあふれる鹿の大群!小鹿もいるので、鹿のママ友会のような様子。どやどやと道の真ん中に居座り、なかなか道をゆずってはくれません。流れ星よりたくさん鹿に出会いました。鹿と衝突するとフロントガラスが割れ、車が凹む…と聞いていたので、道をあけてくれるまでじっと待ちます。他にも道中、判別できない謎の小動物とも時々視線があったりして、さながら京都の山あい道はナイトサファリ。真夏の真夜中のドライブにて、改めて“獣害”の意味するところを確認してしまいました。

8月16日。

京都は五山の送り火。我家はマンションの9階で、窓から遠くにちょこっと大文字が見えます。十数年前から当時勤務していた病院の仲間と、自宅での“大文字パーティー”が恒例の行事。私が退職した後も、年に一度集まって顔を合わせます。いつも医療業界のポヤキが中心なのですが、今年は異変が。なんと世間同様、昔の同僚の不倫話で盛り上がりました。「まじっ、あのオシドリ夫婦が!」「そうかあ、やっぱりあの先生の奥さんはもう違う人になっていたのか」などなど…と驚くことしきりでした。横で聞いていた医療業界でない旦那は“やっぱり変な業界や”とつぶやいたのでした。

奥野景子

●7月末、京都の蒸し暑さが絶好調な時期に家のエアコンが急に壊れた。少しの間、エアコンのない生活を送った。管理会社の手配で電気屋さんがエアコンを取替えに来てくれた日は、特に蒸し暑さが厳しい日だった。汗をだくだくかきながら男性2人がエアコンを取替えてくれた。その姿を見ながら、その一か月ほど前に亡くなった人のことを思い出していた。彼は、電気屋さんだった。一人親方で、大きな仕事をする時は自分で信頼できる人に声を掛けて日当を払い、自宅の電気系統の不具合などの小さな仕事でもすぐに駆け付けた。「そーゆーことが大切やねん」と、ほころびながらも真剣な表情で言う姿が印象的だった。

こうゆうことが、ちよくちよくある。本屋さんを歩いていると以前担当していた人の息子さんの名前が目飛び込んできたり、信号待ちをしていると目の前を猛ダッシュで走る人がいて半笑いになりながら見ていると以前担当していた人の娘さんだったり、写真を撮っている人を見ると以前担当していたカメラマンのことを思い出したり、大学に向かう道で自転車を漕ぎながらその道を通ってよく行った人のことを思い出したり、道端の花を見ては本当は全然行きたくないせに外に行きたいと言う人のために気が向いた時に写真を撮っていたことを思い出したり。。

だから、何なんだと言われると少し困る。でも、そんなこんなが私の日常の一部だったりもしている。それだけじゃないけど、それもまた、である。

追記：この短信を書いた日に家の近所で買い物をしていると、どこかで見たことのある男の子を見つけた。「ん？」と思って顔を上げると、以前担当していた人のご家族さんがいた。たぶん、たまたま。でも、久々の再会だった。

●先日、ある研修会に参加した。そこで講師の一人が「考えたり、思ってるだけじゃあかん。書いて、出さなきゃあかんのや」みたいなことを言った。文脈から考えると、たぶんその講師が言いたかったことは、そんなことじゃないと思う。それを言いた

かったのは、私だったんだろうなと思う。だから、そんな風に聞こえたのだろうな、と。

だからこそ、このマガジンの連載は大切にしたい、と改めて思う。そして、自分の考えていることや思っていること、悩んでいることを伝えたい、話したいと思えること、それを受けてくれる場や人がいることは、とてもありがたいなと改めて思っている。

柳 たかを

記憶の中の住まいの広さ

本誌連載中の漫画「東成区の昭和」は、作者が生まれ育った大阪東成区の生家を舞台にしている。

昭和時代の古い木造二階建ての長屋だったが、約20年前に建築士の兄が親と同居できるようにと、兄自身が設計して鉄筋三階建てに改築した。生家の敷地は11坪弱の広さ。玄関の間口は二間(約3.64m)、奥行き9.8mぐらいである。

今、私は、DIYで約10坪の木造小屋を奈良県天理市の妻の生家の土地に建てよう計画しているが、上の我が生家とほぼ同じ広さの敷地であることに愕然とした思いである。「狭い」のだ。更地の土地の前に立って見るとあまりにも狭い。

小学生のころ、二階建て長屋の我が家を広いと思ったことはないが、これほど狭いと感じることはなかった。5~6歳頃までは、兄二人と姉と僕の子供4人が1階四畳半に川の字になって寝た。その後、裏の中庭をつぶして兄達の勉強部屋を建てたり、二階の物干し場のスペースを板敷の部屋に増改築した。やがて兄達が独立し、姉も結婚し家を出て行った。成長するにつれ、家はだんだん狭くなっていった。はるか頭上にあつた鴨居が頭のすぐ近くになったが、とくべつ「狭い」と意識することはなかった。

たぐりよせた生家の記憶と、今、何も無い同じ広さの更地に感じる違和感を交互に思い浮かべながら記憶の中の住まいの広さの不思議に浸っています。

齋藤 清二

今年の夏は、昨年ほどの猛暑ではなく、大きな行事も少なく、比較的のんびりと過ごさせてもらった。お盆休みにしたことという、一つは7月末に極めてタイミング良く発売された、ドラゴンクエストⅪを手に入れて、楽しむことができたこと(まだクリアはしていない)。



もう一つは今回番外編のテーマに取り上げた、『君の隣臓がたべたい』の原作と映画を見たことだろうか。いったい何をやっているのかと言われそうだが、いわゆるハイ・カルチャーと呼ばれているものが学術の世界では注目されることが多い中で、一見浮かんでは消えるように見えるサブ・カルチャーの中にこそ深いレベルでの人間の営みが伏流のように流れているのではないかという問題意識をずっと持って来たので、ちょうどタイミング良く、それらについて考えてみるよいきっかけになったと思っている。

石田佳子

なぜか昔から、ムーミンに出てくるスナフキンという旅人のファンです。さすらう旅人は、自由気ままに見える反面、「根なし草」のような寂しさや孤独を抱えているでしょう。それでもあえて、居心地の良い(それなりに馴染んできた)土地を離れ旅に出る、(そうせざるを得ない)人の目には、一体何が、どのように見えているのでしょうか。。。自分なりに想いを馳せながら、今回はいろいろな旅について書いてみました。

そう言えば、私はマレーシアに住み始めて半年~1年目の頃、微熱や咳といった体調の優れなさに悩まされていました。特に原因は見当たらず、医者には「気候や風土が違う国に来て、ずっと旅をしているようなものだから、身体が慣れる(土地

の人が持っている抗体が出来る)までは、我慢する他ない」と言われ。。。なんだか自分が「中途半端な根なし草」になったような気がして、心細かったのを覚えています。しかし(約4年目になる)今は、体調の悪さも違和感も感じることなく暮らせているので、僅かだとしても当時に比べればマレーシアに根を伸ばすことが出来ているのかもしれない。

しすてむ♪きよたけ

入者(にゅうしゃ)式

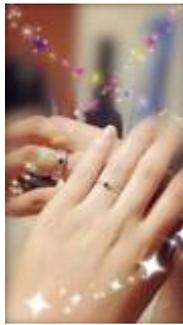
入籍とは何だろうか？多くは、結果的に長く続いたかどうかであるが、結婚は、先にこれから先もアナタと居る約束をする。でも、離婚もある。なんなら、不倫関係だってある。社会的な制度があり、上記約束は実現する。感情と制度が交わったり、乗り越えたりしているかのようだ。僕は、結婚したい！と言われても、そうだなあ〜…なんだろ、それは…とってきた



し、してもいい！とも思ってきた。でも、どうせ、恋愛スタートで言ってるし、何かあったら今の感情なんて終わるんだろ〜と思ってきた。じっさい、そんなことに会ってきた。だから、入籍なんてね〜…とネガティブに思っていた。でも、社会にあるから一回くらい試してみてもいいんじゃない？とも思っていた。でも、いや〜なんだか、社会にある



からって合わせていくのもちょっとユーモアに欠けている気がした。なら、したい様に見てみたい！相手の想いも自分の素直な想いも受け取りたい！そう想い合える相手に出会った。そんなこんなで、勝手に入籍…いや、互いに履歴書を作り、交換。見事採用し合えました。僕たち、入者しました！彼女と人生を共にするとはどういうことだろう。



本編と上記儀式は関係ないのですが、日常生活におけるコミュニケーションという大きな括りでは関係あるかな…。今シーズンは、前回綴った「蚕(解雇)キャラ」を引き続き。

だって、いきなり「契約終了」を迎えたのも。一体、どうなってるの！？次回の短信……退者式になってたら、笑いましょうかね！！

小林茂

私にとって対人援助マガジンの連載は、論文よりも固くなく、日ごろの活動から感じていることを少しまとめておきたい、という目安で書いています。日常の出来事からいろいろ思うことがあり、また意図せず起こった出来事の楽しさを伝えたいことがあります。そんなこともあり、今回の「対人支援点描」は少し遊んでみました。でも、「遊びすぎだ」と感じさせてしまったらごめんなさい。

毎年8月、体験学習のTグループに参加しております。北海道ヒューマンインタラクションラボラトリー主催で、私も見習いで関わっています。宿泊型の研修です。以前は、岩見沢にある温泉付きのホテルでしたが、長沼温泉のホテルに会場が変わり、このところは南幌温泉のホテルが会場となっています。構造化を行い自分と他者に向き合うことはしんどいところがありますが、温泉は癒しの要素がありますね。今回は、その会場となった南幌温泉を紹介し

<温泉紹介>

☆なんぼろ温泉ハート&ハート

場所：北海道空知郡南幌町南 9 線西 15 番地

TEL011-378-1126

交通のアクセスはバスなど車のみ。周りは広々としたパークゴルフ場があり、その周りをさらに田園や畑が囲んでいるようなのどかな場所にあります。地元の人や研修・合宿で利用される方が多いようです。

泉質：ナトリウム-塩化物強塩泉(旧泉質名：強食塩泉)。中性高張性高温泉。源泉かけ流しで、茶褐色のしょっぱい温泉です。露天風呂、人工ラドン風呂や薬湯、サウナもあり楽しめます。

水野スウ

この夏、すきま時間があるとは、よく針と糸を手にしていました。ちくちく、…と針目だけを追いかけていく単純な作業は、今の政治状況に、ざわざわと落ち着かない私の心を鎮めるのに、とても役立つセラピーです。

姉の着物をほどいた布から一着作る、といった大物にとりくんだ時期もあったけれど、今年は小さなものづくりに集中。すでにあるものに手をいれた repair だったり、作り直しの remake だったり、時にまったく新しいものを生みだしちゃう reborn だったり(たとえば円形のテーブルセンターからエプロン、古いギャザースカートからブラウス、といった具合に)。

とりわけリペア、修理というより繕う行為に、今はとても惹かれています。古い生地が弱くなっているところに、別の布をあててつぎはぎしていく。クレイジーキルトという呼び名もあるらしいけど、繕いを重ねていけばいくほど布は強くなり、そこに新しい模様が生まれ、愛着も一緒に縫い込まれていきます。

そういえば、高畑勲さんのインタビューのなかに、「ぼろぼろの平和を繕う」「繕え、平和を」という言葉がありました。うん、たしかに、今の日本の平和はかなりぼろぼろです。

憲法もそうです。理想として平和を掲げてはいるけれど、現実、すこし強く引

張れば今にも裂けそうなくらい、平和も、憲法も、劣化しています。

「平和」とまるで関係なさそうに思えた針仕事の、繕う、ということ。高畑さんの言葉にハッとしながら、私は、手間暇かかって、めんどくさくても、新品にとりかえるんじゃないくて、今ある平和を繕う人、そのお針子の一人でありたいなあ、と思います。

秋になればまた、けんぼうかふえの出前がふえてきます。その一回一回が、私にとっては平和を繕い続ける作業なのだ、と意識しながら語りたい。その縫い目をあとの人たちにも見てもらえるように丁寧に繕い、語り続けたい。全国に、そんなお針子さんたちがどうか増えていきますように！

中島弘美

対人援助学会研究会です。

今回は、2017年5月26日に大阪府立大学の川川聡子さんが「10代で出産した母親と家族の実態に合わせた支援のあり方」をテーマにお話しいただきました。

長年、若い母親たちへの聞き取り調査と支援をされているお話は、興味深いものでした。なかでも、関心を持ったのは、子育てに関する内容です。10代の若いお母さんの方が虐待の数が多いのではと想像していましたが、実際は20代以上の母親の方が多く、年齢によってリスクがあるわけではないとわかりました。若いママだからこそ特別に支援が必要というよりも、すべての親そして、子育てをしている家族にさまざまな支援が求められています。たとえば、孤立しないよう交流をする機会が必要であり、ライフプラン作成の講座が有意義であることなどです。

参加者は実際に母子支援にかかわっておられる方もおられ、5.6人ずつのフリーディスカッションは、白熱していました！

藤信子

8月の半ばにベルリンに行ってきた。ベルリン郊外のポツダムに出かけて、サンスーシー宮殿やポツダム会談の行われたチェリエンホーフ城の庭を歩きながら、サンスーシー宮殿を建てたフリードリヒ大王というのは、マリー・テレジアと戦争したひとだったかしらとぼんやり思いながら、

素晴らしい宮殿の庭の階段を歩いた。チェリエンホーフ城は今はホテルになっている。池(なのか湖なのか)と木立(林?)もきれいだけれど、ウィルソン、スターリン、チャーチルが1945年7月17日から8月2日までここで会談をしていたことを考えると、私は泊ってもあまり良い夢を見るようには思えなかった。

千葉晃央

「私が、上岡龍太郎です」大阪で幼少期から過ごした私には、このセリフはテレビのブラウン管を通して日常的に聴いてきた。土曜日、学校から帰って、テレビをつけると「ノックは無用!」、日曜日には「ラブアタック!」「花の新婚!」コンピューター作戦をよく観ていた。そして、金曜日深夜の「探偵ナイトスクープ」「鶴瓶上岡パペポTV」に至っては毎週の放送が楽しみだった。特に「鶴瓶上岡パペポTV」は毎週録画して、何度も見た。カセットテープにもダビングして、高校の修学旅行にミニラジカセを持参し、移動のバスの中や旅館でもかけていた。

「パペポ」のスタジオ観覧に読売テレビまで行ったことがある。その頃、笑福亭鶴瓶と上岡龍太郎はどっちが相撲が強いのか?!を競っていた。そんな様子を間近で目に焼き付けた。

現在、YOUTUBEでは「パペポ」の動画が結構な数上がっている。それを聞きながら眠ることがここ1年ぐらいの私の定番となっている。動画を観ていると見逃した回も多いことに気付く。そして、それを聴いているときには、すっかり気分はその当時。そう、実際には今から30年前なのに、自分は今何歳か?今は西暦何年か?そんな意識は混濁する。上岡龍太郎は2000年春で芸能界を引退。事前の公言通り、有言実行をして今に至っている。京都にいるそうだけれども、現在京都に住む私は見たこともないし、目撃談も何も聞いたことがない。そんななか数年前の横山ノックの葬儀での弔辞が本当に久しぶりの姿だった。上岡節の弔辞は何度も観た。さすがの弔辞だった。

団士郎編集長が「笑福亭鶴瓶論」(戸部田誠著)の写真をSNSにアップした。早速、手に入れようと本屋へ。鶴瓶さんの活躍

はいつも拝見している。自分が10代の頃、もっとも観たテレビ番組の出演者が活躍している姿は、本当にうれしく、そして今もおもしろい。それが新書で「鶴瓶論」までになるとは…本当に興味深い。…ふと思いつき、本屋の検索コーナーで上岡龍太郎の本はないかと検索。するとあるではないか。2013年刊行、現在4刷りの「上岡龍太郎 話芸一代」(戸田学著)!早速購入。あの二人が書籍で手元にそろったのである。

鶴瓶さんの天然ボケ(芸風含む)による、失敗をどう生かすか?のエピソードは私のどんくさいところをどう処理するののかの手本となった。誰とでも気さくに話す姿勢も、そうなりたと思った。そして、論理的思考、老賢者的イメージの上岡師匠は、その正直さと出すぎずシャイなところ、そして自らを貫くところは、人生において何が大事かを見せられたような気がしてきた。



現在、その二人の書籍を両手にどこから、そしてどっちから読もうかニヤニヤと思案しているところである。パラパラめくると、二人のことはやはり結構知っている。この「上岡龍太郎 話芸一代」では巻頭は引退した上岡龍太郎のごあいさつで始まる。久しぶりのご本人からの発信に出会う。40代になった私が感じるものは、10代のころ感じていたものとは当然ちがっている。あくまで「芸」に生きた人である。その芸の世界には清濁様々なものが必ず含まれていることが今はわかる。それは20代以降、テレビの世界ではなく、現実の世界(特に対人援助の世界)で様々な方に出会った私の経験が見せてくれるものかもしれない。それでも、ああいう人が世間において、それを公共の電波で日常的に放送していたことは大切だったのではないかと思うし、その時代が終わったことだけはひしひと

感じている。

今となっては、私が観ていたパペポの頃の鶴瓶さんは自分より年下になり、上岡師匠は今の自分の数年後という年齢に自分になった。当時の動画を観ていると、自分はアレから30年、あなたたちのような年を重ねてきたらどうかと考えてしまう。

中村周平

今年の初め、受傷以来、大変お世話になった方の訃報が届きました。昨年の夏にお会いしたときは変わらずお元気だったのに。その人が元気でいてくださること、電話をしたときになんでもない世間話ができること。それが私にとって大きな心の支えでした。今夏、お焼香をあげさせていただくために自宅に伺いました。昨年の夏と何も変わらない風景なのですが、その人がいないだけで全く違うところに来たような感覚から抜け出すことができませんでした。その人の存在の大きさをあらためて実感しました。もっというろ話したかった、声を掛けてもらいたかった。いつか来るとは思っていた別れでしたが、なかなか割り切れない自分がいます。

中村正

2017年の7月、「法と精神衛生国際学会」で報告するためにチェコ共和国の首都、プラハにいった。2015年7月の大会はウィーンだった。2年に一度開催される。中世の街そのままの旧市街地をはじめ、モルダウ川にかかるカレル橋、プラハ城、カフカミュージアム、ミュシャミュージアムなど、どこもかしこもとにかくすごい人だった。観光客の多さは京都以上だ。さらに印象的だったのは共産主義ミュージアム。第2次世界大戦から1968年のプラハの春を経て1989年のビロード革命へといった歴史だが、建設したのはアメリカの実業家だということから学芸員がいてきちんと歴史検証されたものかどうかは疑わしいものだった。東欧の歴史に包み込んで歴史を伝えるということには程遠いものだった。1993年まで続いたチェコスロバキアで終わりをつけ、チェコ共和国になり現在にいたるが、その間の政治的な変化はソビエトの歴史の変遷と重なる劇的なものだ。それも含めて、いたるところにある教会での

コンサート、水みたいに飲むビール、遅くまで楽しむディナー、迷路のような路地が続く中世の街なみ、歩きにくい石畳、道幅いっぱい走行するトラム電車など、古都の



雰囲気を楽しんだ。もちろん日本チームが開催した学会のセッションも40人程が参加してくれ盛況だった。その学会のリーダー、デイビッド・ウエクサー教授を日本に招聘した講演会が9月1日の犯罪系諸学会連合大会の記念企画として國學院大学で開催される。この連合大会の研究企画を担当しているの、その準備に今も忙しいが、実りの多い夏となった。次回の大会は、テロのあったバルセロナらしい。それでも今から楽しみだ。

牛若孝治

新たな仕事 今日と芸術センターでは、8月19日から、「アジア回廊現代美術展」が開催されている。東アジア文化都市2017京都のメインプログラムとして、2条城と今京都芸術センターの2箇所で、日本・中国・韓国のアーティスト25組を紹介している。

私は今、京都芸術センターで、韓国のアーティストの作品の案内役(ドーセント)を行っている。「視覚に障害のあるあなたはどうやってドーセントを??」なんて愕かされるかもしれない。もちろん、そう思われるのも無理はないだろう。

このドーセントの仕事、なんと台本があって、その台本に従って、来館者を案内するという方法である。もちろん、作家を交えての議論やリハーサルを行って納得したうえで、私は今、この仕事を楽しい気持ちで行っているのである。

「視覚に障害のある人たちは、あんまマッサージ指圧鍼灸が適職」なんて、社会

から押し付けられたステータスに唯々諾々と従ってたまるか！もちろん、その仕事を本業にしながらも、一方で自分なりの新職業開拓も忘れてはならない。そういう意味で、この今、京都芸術センターでの仕事は、私にとっては新しい挑戦であり、これからの新職業開拓の踏み台になるのではないかと考えている。ちなみに、「アジア回廊現代美術展」は10月15日まで開催されている。

袴田洋子

久しぶりに締め切りに間に合いました。事務所にこもって、書きました。割りりと、筆の運びは良かったようです。自分の会社に従業員さんがいる環境になり、お給料を支払うという人生で初めての出来事になっています。「責任」をやっと持ったのかもしれない。そうそう、うちの父親が認知症になり、デイサービスに通い始めました。いよいよ他人ごとではなくなりました。あのくそおやじがデイサービスに通えるのか、と本当に心配でしたが、担当ケアマネさんが、親父に合うデイサービスをコーディネートしてくれました。よいケアマネさんをゼミ仲間を紹介してもらえて、助かりました。

団遊

娘4歳が、溶連菌感染症になりました。息子の手足口病をもらい、もたえ苦しんだ経験を持つぼくとしては、絶対もらってなるものかと、最新の注意を払いました。高熱と赤いぶつぶつに苦しむ娘を見て、「気の毒だな」と思いつつも、「大人がなると何倍もつらい」というネット情報を見て、二の舞を避けるべく距離を置きます。やがて解熱し、元気回復、抗生剤も飲み切って無事クリア！と思ったら、1週間ほどして、また同じ娘4歳が溶連菌感染症に。お医者さんによると、「新たにかかったのではなく、ぶり返したのでしょうか」だそう。溶連菌、どれだけシブといねん！

大石仁美

お盆が終わってからの長期休暇に(といてもたかだか10日ほどですが)ニュージーランドに行けることになりました。今から4年前、どこにいくか綿密な計画を立て、

現地のガイドさんも頼み、レンタカーを借りていざ出発という時に、連れ合いの母上が誤嚥性肺炎で入院ということになり、年齢97歳ということもあって、こりやダメだと急遽キャンセルしたいきさつがあります。

そのおばあちゃまは認知症があったものの、生来陽気な方で、枕元に医師、栄養士、家族等が集い、あまりもたないだろうなど話しあっていた時、いきなり目を開けて、「あら、みなさまお揃いでどうなさったの？」など言ったものだから、皆びつくりぎょうてん。あとで笑い話になったいきさつのおばあちゃまです。

口から食事は無理なので、とりあえず点滴でつなぎ、胃瘻をしましょうという医師に納得できず、日々生気を失っていく姿を目に、退院させることを決意。たとえ一口でもいいから再度誤嚥も覚悟で口から食べさせようと、家庭医を探して、看取りを頼み、それまで入所していたグループホームに引き取ってもらうことにしました。

そのグループホームのスタッフたちの細やかな介護と語りかけが功を奏し、スープやゼリー等を美味しくそうに食べ、トイレに行けるまでに驚異的回復をしたのです。その後100歳を目前にして、大往生をとげました。

私たちは、本来持っている自然の力をいかに引き出すかが大切なだと改めて教えられました。

人は周りの人と接触のあり方如何で、生きも死にもするのですね。

おばあちゃまが亡くなって、落ち着いた今、心残りだったニュージーランド行を決めました。でも今回は無精してツアーにのることにしたのですが、お任せ旅行のなんと面白くないこと。だってすることがないので。旅にしる、他のことにしる、自分で計画を立て、下調べをし、情報を集め、段取りをする。しんどさと楽しさは抱き合わせ。どれだけ深く関わるかで、充実し満足度が深まるのですね。いまさらながら深く関わってくれた、グループホームのスタッフに感謝するとともに、度々施設に顔を出して、おばあちゃまの横に座り、歌を歌ったり、話しかけたりして寄り添い続けた連れ合いの優しさに、心打たれます。今回手抜きの旅ではあるけれど、お預けを食った分、楽しんで来ようと思います。

村本邦子

楽しい夏休みを過ごした。映画もたくさん観た。やるべき仕事はしっかりした。細々したことには煩わされることもないわけではないが、基本的に満足して生活している。手帳を見ると、9月後半から年末まで忙しくバタバタと駆け回るスケジュールとなる。そうなっても、穏やかさと満足を保てるように、修行、修行。

國友万裕

先日、友人と丸太町にある松葉湯という銭湯に行きました。明治時代からある銭湯で、インコをたくさん飼っていて、京都新聞で取り上げられていたのです。壁に掛けられている古い時計や額を見ていると、おそらく明治時代からあるものをずっと使っているんだなあ一と感じました。老舗ですよね。

僕は10年くらい前までは、なぜ、自分が京都にいるのかわからなくなる時がしばしばありました。以前も書いたと思いますが、僕は元々東京の大学しか考えていなくて、運命のいたずらで京都の大学に入ってしまった、子供の頃から東京での暮らしは憧れていたけど、京都なんて想定外だったので、常に何故京都に来たのか、自分でも不思議な気持ちになることがたびたびだったのです。昔から一般に言われることは、東京は3年暮らせば東京人だけど、京都は応仁の乱からいかなかったら京都人じゃないという、たとえ話。実際、京都は就職先が少ないせいもあって、大学の間だけ暮らして、その後は東京へ出て行く人が多いので、京都ですと暮らす人は少ないです。

しかし、僕はもう35年近く京都で暮らしています。この10年くらいで京都アイデンティティは固まってきました。たくさんの友人ができて、京都の隠れた名所も隅々訪ねて、僕はつくづく、もはや京都人だと自分で自分を認知しました。これからもこの街で暮らします。そのうち、京都本を書けたらなあ一と考えています。

北村真也

「学びの森 探究スクール」、「学びの森

フリースクール」、「学びの森 ハイスクール」、「学びの森 ユースクール」に続き、10月から「学びの森 放課後等デイサービス」がスタートします。

古川秀明

木陰の物語フォーラム in 京都において私に歌わせて下さった、団先生、早樫先生、岡田先生にとっても感謝しています。この夏一番の思い出になりました。



先日ピアノで「舟歌」を聴かせて頂いた村本邦子先生や対マガの編集者千葉君にも聴いて欲しかったのですが、今回は来られてなかったのが残念です。またの機会に聴いていただきたいと思います。

シンガーソングライター

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成をしています。その他にもいくつかの福祉系専門職養成校に出没中。

今年の9月から1つ、11月頃からもう1つ、福祉職に対する新たな研修を企画・担当する予定です。私を含む何人かの「これまでやってきたこと」と、「やってみよう」ということが上手く出会いました。研修講師は今までもやってきましたが、本当に1から、企画段階からの運営という経験はあまりありません。つながりの中で、嬉しい事も悲しい事もまだ起きていない心配事も、多種多様に起こります。でも不思議に、流れが来ているのです。「私が責任者やねんから、頑張っつてやらなあかん！」という姿勢ではなく、「受講生さんと一緒にみんなで作っつていこう、場の力に頼ろう」という思いで作ると、ほんとうにマズイ事はあまり起こらないという不思議現象に、ここ数年気付きました。

坂口伊都

最近よく笑ったのは、研修の場でした。京都で行われた「木陰の物語フォーラム」です。それは、研修とは思えない「ゆるい」ものでした(笑)広島岡崎さんが事務局としてゆるく挨拶をし、Power Point 芸人の岡田先生から川崎先生へのふり、団先生の駄目出し、早樫先生自身の先代まで調べたジェノグラムに驚き、懇親会での古川さんのライブ(個人的には「ひきこもり」が好き)、そして懇親会の最後には、「菅野さんと宮井さんの児童相談所卒業の記念品を懇親会で渡すつもりが、金庫から出すのを忘れたので明日にします」の告知。翌日には、ジェノグラム面接のワーク中に団先生の自撮り棒で写真を撮りまくっている講師陣。

その研修の中では、「団派か岡田派か」がよく話題に上がっていました。団先生のように生きたいけど、それはなかなか難しいという感じでした。その例えに、「財布を無くしたら皆さんどう思います？今日は最悪だあとめちやくちや凹む人は岡田派です。団派は、それがネタになるなあと思うんですよ。」と話していました。いろいろな研修を受けてきましたが、忘れないだろうなあと思います。学びは自分の中に何かを残す行為だから、忘れてしまう研修でないことの意味は大きく、ついでに明日からもうひと踏ん張りしようと思えました。

河岸由里子(臨床心理士)

体が資本の仕事なので、健康には気を付けなければならない。しかし、北海道という場所柄、どうしても車を使うことばかりで、殆ど歩かない。道外に出たときのみ歩くという生活では当然運動不足になる。毎年受けている健康診断では、何かしら引っかかり、精密検査になったりしている。

運動をしなければと頭ではわかっていて、今日はちょっと歩いて来ようと思うことがあっても続かない。今までにも、水中エアロに申し込んで、10回コースに1回しか行けなかったり、水中ウォーキングをトライしても数日しか行けなかったりと、兎に角続かない。

カーブスや加圧トレーニングも考えるが、きつといけないうらうと思ってしまっ

中々一歩が出ない。家でできる運動もほとんど続かない。

クライアントにコーチングをしたりしているのに、紺屋の白袴、医者の不養生。簡単に続けられる運動ですら、せいぜい1か月。本当に我ながら情けない。そこで、ここに書くことで宣言しようと思う。今年はあと4か月あるので、何とか運動を習慣づけ、月1kg程度の減量で、年末までに4kg減量する！次回の短信でよい報告をしたい。

岡崎正明

最近知ったケースである。

21歳の女子大学生。母親(51歳)と父親(54歳)の3人暮らし。家族関係は良く、近くに住む母方実家にも頻りに遊びに行くなど、交流はさかんだという。母方祖母(72歳)と祖父(74歳)が健在で、母方叔母2人もそれぞれ結婚して家庭を持ち、近くに住んでいる。父方祖父母も元気だが、母方ほどの交流はない。

ここまで聞いてどんな感想を持つだろう。「そんな少ない情報だけで言われても…」と思う人もあるだろう。私も20年前はそうだった。ただ、仕事で「家族」という視点を持つようになった今は少し違う。

「母が30歳の時に出産した子。時代的には平均より少し遅めかな。父母は3歳差だがどういう出会いでいつ婚姻したのだろう。他に子どもは作らなかつたのか。できなかったのか？母は3人姉妹でみな近くにいて交流もさかんだという。女性の力が強そうな感じがする。親族に離婚や死別もなく、安定した標準的な印象を受けるな。一人っ子で女子の彼女は、大事にされていそう。実家から通える大学を選択しているし、家族の結びつきは強そうだな…」パッと思いついでに、それくらいは頭にアレコレ浮かんでくる。

別に真実かどうかなんてわからない。鋭い洞察力なんてこれっぽちも無いと自覚しているが、大事なところはそこではなく、想像力。家族の営みを、人の生き方をイメージすることだと思っている。

ちなみにこのケースは公共の電波で誰でも知ることができる。日本テレビ系で放送中の「過保護のカホコ」というドラマの家族だ。聞けば「家政婦のミタ」と同じ脚本

家らしい。なるほどなかなか人物の描き方が印象的。特に黒木瞳演じる独善的で支配的な母親に、毎回イライラしながらハマっている。

さっきの私の想像の当たり外れについて、万が一気になる方はどうぞドラマをご覧ください。

buimen0412@yahoo.co.jp

見野 大介

7月30日に長男が誕生しました。予定日より1か月も早くに生まれたのでハラハラしましたが、母子ともに健康で安心しました。これからはイクメン陶芸家目指して、仕事に育児に頑張ります。

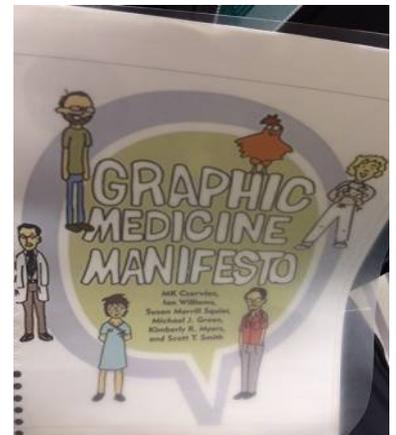
浦田雅夫

80を過ぎた母親が倒れ、末期がんの宣告を受けました。2年前には孫をガンで看取った母だけに自身の化学療法は拒否。というか75歳以上の化学療法は効果より損傷のほうが大なり。したがって積極治療はせず、時の過ぎゆくままにこの身をまかせ。苦労の連続の人生、最後はゆっくり楽に過ぎてほしいと願いながら電車に揺られ帰路。

団士郎

(1)今店頭に出ている雑誌「現代思想」の特集は「コミュ障」の時代。気になったので読んでみた。

平田オリザ氏がそこで書いていることは、私が10年以上、学部の「人間コミュニケーション論」の授業で扱ってきたこととほぼ同じに読める。



氏は理論的に解説を心がけているが、私はそんな気はないまま、受講生達一人一

人の体験学習プログラムとして、最終年をこの秋から始めることになっている。

この間には思うことがいろいろあったので、今の連載にした。どこまで続くかは例によって分からない。

(2)詳細が分かっているわけではないが、愛知県がんセンター勤務のK森さんの打診で、グラフィック・メディシンなるものと関わりが出来た。

アメリカにいる医師で漫画家、ナースで漫画家、などという人たちが、オリジナルのコミック作品を描いているそうだ。当然、単に二足のわらじではなく、業務と個人的体験が融合された世界が本人の手でコミックスになっている。

家族心理臨床家であり漫画家でもある私は、なんとなく自分と同じような人はいないだろうと思ってきたからちょっと驚きだった。

そんな人たちが集まってアメリカでは学会をもう10年近くやっているとか。作品集や理論書籍も出しているらしい。その翻訳本を出すのをきっかけで、K森さんは私が漫画家である事に関心を向けてくれたそうだ。

まずは、パラレルチャートと呼んでいるものと一緒に、学会誌に「木陰の物語」の一作を掲載という打診だった。

世界は面白い！自分から探しに行かなくても、己の必然としての活動が、同じ時代にどこかでも生まれている。シンクロシティと言ったかな。こういう感覚が昔から確かにではなく、何となくあって、私には時々こんなことが起きる。

大谷多加志

7月21日、対人援助学会研究会に参加した。テーマは「猫から目線で動く支援」で、スピーカーはマガジンの執筆者でもある小池英梨子さん。研究会にはなかなか参加できておらず、数年ぶりの参加となったが、テーマである「猫から目線」はもちろんのこと、「システム論」「解決思考」など、対人援助全般にもつながるエッセンスが随所に感じられ、とても面白かった。

後半のグループセッションで他の参加者の方とお話していると、『昨夜のメーリン

グリストの案内を見て、今日仕事を早めに終えてきました！』と3時間かけて来られた方もおられ、司会と広報をしておられる千葉さんのご苦勞の一端も拝見した。濃い時間でした。マガジンも含めて、なかなかやるな対人援助学会！と思った次第。



馬渡徳子

今年の夏、半年前から主要メンバーさんとコツコツ準備を進めてきた「夏休み子ども食堂」が、ついに実現した。ついでに、職場である地域包括で主催する「認知症カフェ」との共催企画も実現した。

きっかけは、一人の患者さんと小学校の先生の言葉だった。「夏休みになると体重が減る子どもたちが増えた」「登校日が原爆記念日ではなくなってから、地域のお年寄りから戦争体験を聴く機会がなくなったけど、生き証人から真実を語って頂ける最後の世代かもしれないのに、それではないのだろうか」...

そうだ！！確かに石川県にも子ども食堂を応援するフードバンクはあるけれど、自分たちでこのチラシをもって地域の皆さんに食材の寄付を呼びかけてみよう！そして、認知症カフェに参加しておられる高齢者の皆さんに、戦争体験を子どもたちに語って頂こう！

予想外の反響だった。いつものチラシに「またか・・・」という反応だった方々から、子ども食堂と共催というチラシを見て、「テレビや新聞を見て、自分も何か応援したいと思っていた」と、野菜や、名産のすいかやお米やお菓子がどんどん集まった。お寺さんが、丁度お盆だからとお供え物をお裾分け下さった。

開催が決定してからの学会や講演で、ちゃっかりとこの話をすると、愛媛、京都、大阪、東京から、名産品やお菓子がサプライズで届き、さながら夏のサンタクロースのようだった。

家族の方には、「本当にお話できるのかしら」と案じられたが、認知症カフェに参加しておられる当事者さんにも、私がインタビューする形で、戦争体験を語って頂けた。

事務長が、内緒でその様子をビデオ撮影下さり、今年の敬老の日に、家族の方にサプライズプレゼントをと考えているらしい。私より一回り以上も若いのに、流石は、社会福祉法人の管理部。粹なことをするなと感服した。

戦争体験を語って頂いた女性の当事者の方が、こんなふうに話を括られた。「こんな苦しい辛い思いをするくらいならば、死んでしまいたいと何ども思ったけれど、母が『明日、とんでもなく良いことがあるかもしれないから、もったいないので、やめときなさい』と、いつも笑ってくれたから、今日私はこうしています。あなたたちには、どうか戦争という言葉がない社会をつくって欲しい。」

胸が、ふるえた。

そして、私の祖父が大学進学の際に、色紙に書いてくれた言葉を思い出した。

「自然の春は、太陽が呼ぶ。

社会の春は、人間がつくる。」

もしかしたら、どなたか有名な方の言葉かも知れないが、私にとっては祖父からの遺言である。

竹中尚文

前回に続いて、私は木村晃子さんとの書簡型連載だけの参加である。相方の木村さんが前回の執筆の頃からとても忙しくされていた。忙しすぎるようで心配をした。私たちの間は飛行機で2時間の距離では如何ともしがたい。

今回は忙しい時の料理を紹介したい。ゴルゴンゾーラの Pasta である。

【作り方】①Pastaを準備する。スパゲッティで十分。②Pastaを茹でる。③その間に別の鍋にゴルゴンゾーラ(なければ他の青カビチーズでOK)を入れて、ミルクを加える。ミルクの量はチーズが溶けるのに必

要と思われるだけ。少なければゴルゴンゾーラの味が引き立つし、塩味の強いソースとなる。少なければその逆。③ゴルゴンゾーラの鍋を弱火で温めて、チーズを溶かす。④茹で上がったパスタを、チーズの鍋に入れてパスタを絡ませて皿にあげる。※パスタはペンを使う方がソースによくなじむが、茹で時間がスパゲッティの倍ほどかかる。

料理中のバックに流す曲は EAGLES の take it easy。今回もおじんロックである。曲のノリがいい。忙しい日は美味しいものを食べて、ノリのいい曲を聴きながら寝てしまう。

【告知】 前々回に終了した私の連載「七日参り」がタイトルを変えて、出版してもらえることになった。タイトルは未定であるが、宗教書専門の自照社出版から出る。団編集長には大変にお世話になった。対人援助学マガジンに書くご縁をいただいた。本の出版にはいろいろとアドバイスをいただいた。イラストや装丁までお願いした。出版社は、これまでにない宗教書を出したいと言ってくれている。そんなわけで、今、私は初校の校正中で新連載が始められない。ゴメンナサイ。

サウタツヤ

9月は学会シーズン。前半、福島フィールドワーカー日本パーソナリティ心理学会@山形日本質的心理学会@東京のツアー終了。福島フィールドワークはサトゼミ学生だけでなく、元ゼミ生で関西大学准教授の木戸先生+関西大学の学生さんも一緒。原発事故からの復興はまだまだの感あり。後半は日本心理学会@久留米。疲れるけど充実～。

川崎二三彦

長すぎる短信ーパソコンクラッシュ

恐縮だが、今回は、某メーリングリストで連載している「研修講師舞台裏」のある回をほぼそのまま掲載することで、近況に変えたい。パソコンクラッシュの話だが、これを経験して思い知らされたことは、パソコンが Windows を OS として動くように、私の日常業務の OS がパソコンだったということだ。

日常生活で電気やガスが止まったら、何はさておきその復旧に努めなければならないが、パソコンが壊れたら、最優先で再稼働させなければならない。

この3か月の最大の出来事がそれだったので、長文になることをあらかじめお断りしていかん転載したい。

書齋で研修の準備をしていた時のことだ。

“あれっ、なんだかおかしいな”

PCの動きが超々スローなのである。1つのキーを操作すると、画面上で作動するまでに数分から数十分かかってしまう。あきれ果ててその場を離れ、お湯を沸かしてコーヒーを淹れ、飲み干して戻り、あらためてPCを睨みつけたらようやく動く。そんな有様だから、一度にたくさんのキーを叩くともはやお手上げ、強制終了するしかない。ところが不思議なことに、再起動させるとちゃんと動くのだ。

“なんだ、心配するほどのことはないじゃないか”

とと思って作業を再開すると、どうだろう、数分間は正常に作動しているようにみえても、再び同様の症状を呈してしまう。

焦った。

このPCのOSはWindows7。6年ぐらい前から講演用に持ち歩いており、全国ほとんどの都道府県を網羅して研修会場を移動しただけでなく、温泉宿やベトナムあたりにもお供してくれた愛用のモバイルマシーンだから、酷使に酷使したと言えなくもない。実は我が書齋には、もっと新しいノートPCもあって、自宅ではこちらを通常使用する予定だったのだが、何しろWindows10が気に入らないので、いつのまにか埃をかぶり、自宅でもモバイルを使うようになっていた。おまけに、最近では2台のPCでデータをバックアップしておくこともおろそかにしていたので、このままでは過去のデータも一部失われる可能性がある。

立ち上げては強制終了することを繰り返してみても、復旧、修復させるのは無理だとわかって茫然自失。連れ合いが書齋にやって来て、入院生活で出会った同室者の面白おかしい人生模様を語って

れても心ここにあらず、とんちんかんな返事をするしかない。

結局、当面の解決策は一つ。(この週)4泊のホテル暮らしに、結構重いWindows10のノートPCを同道させるしかないのであった。



「USBメモリなどで、データだけを持ち運べばいいのでは？」と思われる方がいるかも知れないが、マシーンが違えばスライドの動作は微妙に変わる。細部にこだわる「パワボ芸人」として、それは決してあってはならないのである。

*

鳥取県Y市の研修会場には、用心のため開始1時間近く前に到着した。

「この後、飛行機で横浜まで移動されるんですよね。天候が気になります」

「いえ、大丈夫です。なんとでもなりますよ」

この日、当地には台風5号の影響で暴風警報が発令されており、夜間に予定されていた住民説明会なども中止されていた。それゆえ、帰途についてしきりに心配してくれているのである。事実、四国を発着する飛行機はほとんどが欠航していた。

「PCの音源を使って会場に音声を流せますか？」「できますよ。イヤホンジャックはどこでしょう」、こんなやりとりをしながら、準備を続ける。

「プロジェクター接続端子は、どこにありますか？」「PCの右側です」

そう返答して確認すると、あるべき場所に接続端子の15ピンコネクタが見当たらない。考えてみれば、いつも使っているPCとは違うのだから当然のことだ。

「あっ、スママセン。間違えました」

照れ笑いしながらノートPCのぐり見回すのだが、あるのはHDMI端子だけ。15ピンコネクタがないのである。HDMIのほうが性能はよいのだが、会場の設備ではこ

の端子が使えないという。まさか、いつも使っている 15 ピンコネクタがノート型にならぬとは思ひもかけず、これでは逆立ちしたって我が PC を使うことができない。まさに窮地に陥った。

「スママセンが、PC を貸していただけませんか」

こうなった以上、方法はそれしかない。ただし、用意してもらった PC を見ると、パワポのバージョンが「2007」となっている。すぐに悪夢が甦った。

2 年近く前、北海道 H 児童相談所からの依頼で出かけた研修で、似たようなことがあったのだ。そのときも持参した PC の接続ができず、やむなく今回と同じ「パワポ 2007」が入った PC をお借りしたのだが、結果は散々だった。私が使っているのは「パワポ 2013」なので、新バージョンで付加された機能が全く作動せず、苦心の作が台無しになった。

今回も、開始早々、危惧していたことが起こった。暗澹たる気持ちで先を進めるのだが、中でもひどかったのは、作成したスライドのうち 2 枚が、懲りすぎたせいか完全に白紙状態になってしまったこと。臍を噛む思いで幕を閉じることとなった。せめてもの慰めは、終了後、主催者が、「要保護児童対策地域協議会についての研修は何度か聞いていますが、今回が一番わかりやすかったと思います」と言葉をかけてくれたことだ。

*

さて、次は横浜に向かわねばならない。「少なくともフライトの 1 時間前には、欠航の有無がわかります。それから JR を使っても、午後 11 時過ぎには新横浜に着くことができますよ」

親切にも、講演の間に交通情報を調べてくれていたのだが、翌日は朝から私の職場「子どもの虹情報研修センター」で研修プログラムが始まり、開会挨拶要員の私に遅刻は許されない。より確実に到着すべく飛行機をキャンセルし、JR を利用することにした。幸い 12 時過ぎの特急があったので、それに飛び乗ったのが運の尽き。飛行機は多少の遅れで飛び立ったのに、列車は途中駅で止まってしまった。

「大変ご迷惑をおかけします。雨のため、しばらく当駅で停車いたします。運転

再開のめどは立っておりません」

「繰り返しご案内いたします。現在、線路の状況を確認していますが、確認作業にはおおむね 1 時間程度かかる予定です。運転再開は、その後になります」

こんなアナウンスが繰り返され、たつぷり 2 時間は停車してくれたため、横浜のホテルに到着したのは午後 9 時過ぎ。都合約 9 時間の長旅となってしまった。

*

翌 8 月 8 日、午前中の開会挨拶を済ませると、午後には私が担当するコマがあった。残念ながら、我が虹センターにも、HDMI 端子はなく、センターが所有する windows10 の PC を使って講義に臨む。幸いパワポのバージョンは「2013」だったので、私が使っているものと同じだが、実は個人 PC に独自にインストールしているフォントが使えないため、ところどころで不具合もあった。

が、虹センターの研修スタッフは優秀だ。

「思わず聴き入ってました」

虐待死事例をテーマにした講義だったが、こんな風に感想を伝え、フォローしてくれるのである。そして付け加える。

「うまくいかなかったのは、改行が乱れたところですね」

「フォントが変わったから仕方ないよ」

全くとんだ災難というほかないのだが、この週は木曜にも新潟県 T 市の研修を引き受けていた。前日、いつものように内容の最終確認をしようとするのだが、PC のことが頭から離れず、どうあがいても考えがまとまらない。「頭が真っ白になる」という言葉があるが、あれは、ことの起こったその瞬間だけでなく、それが尾を引いている間、ずっと続くのだと思ひ知る。もはや出たとこ勝負でやるしかない。それより何より、パワポが動かかどうかが心配だ。直前の 2 つの研修で懲っていたので、主催者にあらかじめ事情を説明してテスト版のパワポを送り、接続端子の確認と、場合により PC を借りたい旨を伝え、会場に向かった。

「去年、新潟県主催の研修会で講師をされましたよね」

「ああ、はい」

「実は私もその研修に参加していて、是

非うちでもお願いしたいと考えたんです」

駅まで迎えに来てくれた担当の方が、会場に向かう車中でこんなことを漏らす。これでしじつたら目も当てられないと恐怖を感じながら、到着するとまずは接続を確認する。

と、どうであろう。ちゃんと HDMI 端子が用意されているではないか。完璧な準備に、感謝するしかない。

終了後、京都へ帰る新幹線の中でメールをチェックしていたら、担当者から早くもお礼のメッセージが届いていた。

「虐待や通告のことについて、知らないことがたくさんあって驚きました。私は小学校の教師として毎日子どもと関わっていますが、貴重なお話をしてくださり、本当にありがとうございました」

こんな感想がたくさんあったとのこと。本研修は、おもに学校教職員向けのもので、10 万人に満たない人口規模の自治体で約 270 人の方が参加されており、中には校内研修と位置づけて多くの教員が参加された学校もあったという。

夜 10 時半過ぎ、どうにか自宅にたどり着いてぐっすり眠った翌日の朝、早速新しい PC を買いに走ったのは言うまでもない。(2017/08/25 記)

荒木晃子

今回の対マガ 30 号は「続番外編」として執筆した。今回は、筆者が生涯背負うと決めた大きなテーマに、一回限りの番外編として執筆したつもりだった。しかしその後、「今は何もできない、手段を持たない」と感じていた自分に予想外の変化が起きた。現在は、第三者ドナーの提供卵子で生まれた(今後生まれるであろう)子どもたちとその家族、そして、その子どもたちの誕生に不可欠な存在のドナー女性とその家族を守っていきたい、「起きたこと=児の誕生」に責任を感じる自分だからこそ、決して目を背けてはいけぬ、と考えている。今後も続くであろう、児が第三者ドナー卵子で生まれたことへの是非を問う厳しい世論に、真っ向から意見する立場に自分は在ることを実感している。本マガジンの執筆も、“自分にできること”のひとつである。

鶴谷主一

見慣れないメールが届いていた。
対人援助マガジン 13号「日除けの作り方」を見て、日除けシートメーカーの方が自社のサイトで紹介しても良いか？という問い合わせだった。

もちろん快諾したけど、「よく見つけましたねえ！」と電話で話した。ネット検索してヒットしたのだという。ネット上にあるということは、対人援助業界外の人にも時に広がるということなのだ実感した。

原町幼稚園

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

木村晃子

子どもの頃の夢は、「小説家になること」だった。大人になるにつれ、「自分の書いたものが本になればいいな。」などと出版を夢見ることもあった。

今の時代は恵まれている。出版などと大それたことをしなくても、このようなWEB上で自分の書いたものが世の中の目に留まる機会がある。

最も、まとまりある文章を書かなくても、SNSと呼ばれるものが日常に存在し、個人の主張が気軽に発信されている時代になっている。ここに、様々な現代的課題があるのは承知している。表現の自由としての発信と、言論統制としてのチェックの目。

本編で触れたが、幾分かの事情があって、今回の連載は中止しようかと考えていた。そんな時、まったく存じ上げなかった方が、たまたま居合わせた場所で声をかけて下さった。「対人援助学マガジン、読んでいます。」と言ってくださったのだ。誰の目に留まるかわからない、この広域発

信の媒体で、書いている人間と読んでくださる方との出会いは嬉しい。

休まないで、書こう！と思って、路線変更し、日々の雑感を書いてみた。

北海道 ケアマネジャー

三嶋 あゆみ

相模原殺傷事件から1年目に「障害者を殺すな神戸デモ」に参加しました。「障害があっても生まれたい」、「地域で生きたい」、「同じ学校で学びたい」、「障害者は不幸じゃない」。

切実すぎるコールに声がつまりました。160人でアーケード街をずんずん歩いて注目度バツグンでした。

乾明紀

我が家には、3歳と1歳の男の子がいます。とてもとてもかわいくて、大好きな2人なのですが、年齢的に手ごわいときでもあります。

長男は人に指示されることが嫌いで、やってほしくない行動を注意しても「大丈夫だよ。大丈夫！」と言ったり、巧妙な言い訳を述べたりして行動をなかなか改めません。



次男は長男ができることは自分もできると思うようで、金網をよじ登ったり、ソファの背もたれで“イナバウアー”のような姿勢から逆立ちして降りようとしたりするの目が見えませんが、毎日朝昼晩と面倒を見

私は、平日の朝夜と休日しか彼らの面倒を見ませんが、毎日朝昼晩と面倒を見

てくれている母親（現在は専業主婦状態）は本当に大変ですよ。同僚の先生と子育ての話になった際、「仕事してる方が楽だよ」と言われてましたが、本当にそうですよね。うちはふたりともほとんど昼寝をしないので、ちょっと一服という時間ありません。

母親のストレスを軽減し、少子化対策を本気でするのなら、夫が取得しないと損をするスウェーデンの育児休業制度（夫が90日間取得しないとその分の休業期間は放棄したことになる。また、スウェーデンでは、給与の8割を休業補償として給付している）を日本も導入すべきでしょうね。小さい子供の子育ては大変ですが、今しか濃密な時間を過ごせないとも思うので、スウェーデンにいたら取得していただろうなあ。

高垣愉佳

緩和ケアってご存知でしょうか？患者さんの苦痛を取り除いてQOLを大切にするケアです。長年の念願かなって、緩和ケア部門で心理士として働き始めました。緩和ケアとホスピスの違いは？患者さんとご家族にとっての生活の質とは何か？苦痛とは何か？心理士として・医療チームの一員として・病院に雇用されている職員として等、重層的に存在する倫理の中でどれを重視すべきなのか？緩和ケアの中で心理士が担える役割はどのようなものだろうか？まだまだ珍しい緩和ケアという領域、そしてその中で更に少数である心理士として、日々様々な疑問に会い、考えながら働いています。実践を重ねて、いつか緩和ケアについてもご紹介できればと思います。